令和７年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証

多分野での高・専連携を実現する一貫型職業教育プログラムの開発・実証

成　果　報　告　書

2026 年 3 月

一般社団法人　沖縄専門人材開発研究会

目次

はじめに 2
第 1 章　事業概要 3
　第 1 節　事業の趣旨・目的 3
　第 2 節　実施体制 4
　第 3 節　事業背景 7
　第 4 節　事業内容概説 11
　第 5 節　今年度における取り組み概要 14
　　第 1 項　実施委員会・各分科会・個別協議の開催 14
　　第 2 項　開発 14
　　第 3 項　実証講座 15
　　第 4 項　教員研修 16
第 2 章　実施委員会・各分科会の開催 17
　第 1 節　実施委員会 17
　第 2 節　各分科会の開催 18
第 3 章　開発 19
　第 1 節　カリキュラム設計 19
　　第 1 項　高等学校1年生用カリキュラム 19
　　第 2 項　高等学校2年生用カリキュラム 19
　　第 3 項　高等学校3年生用カリキュラム 20
　　第 4 項　専門学校1年生用カリキュラム 24
　第 2 節　教材開発 25
　　第 1 項　「高校1年生用」「高校2年生用」モデル教材の評価・追加開発 25
　　第 2 項　「高校 3 年生用」モデル教材の開発 26
　　第 3 項　「専門学校 1 年生用」モデル教材の開発 28
　　第 4 項　e ラーニング教材などの追加開発とプラットフォームへの実装 28
　第 3 節　一貫型職業教育支援プラットフォームの整備と追加カスタマイズ 29
第 4 章　実証講座 31
　第 1 節　実証概要 31
　第 2 節　ビジネス分野 33
　第 3 節　自動車整備分野 36
　第 4 節　グローバル分野 38
　第 5 節　情報技術分野 42
　第 6 節　実証講座のまとめ 45
第 5 章　教員研修 47
　第 1 節　教員研修の実施及び教材の追加 47
　第 2 節　教員用ガイドの追加開発 51
第 6 章　今年度における活動項目のまとめ 52

はじめに

本報告書は、沖縄県内の専門学校が企業と連携して、高等学校のキャリア教育を支援する実証授業実施と教材開発の成果をまとめたものである。

本事業は、専門学校や企業が高校と連携し、高校生が将来の進路選択に役立つ実践的なキャリア教育を提供することを目的としている。実証講座と並行して、キャリア教育教材やキャリア教育支援基盤システムの開発も行っている。

今年度は、高校1～3 年生を対象に、専門学校 5 校、企業・団体等の 7 社・法人、工業科・商業科・普通科高等学校 4 校が連携して実証講座を実施してきた。

実証講座では、高等学校のキャリア教育関連の授業に、専門学校教員や企業などの職業人がチームティーチング形式で支援し、職業人講話、グループワーク、実習、現場見学・体験などの様々な形式で授業を実施してきた。

その結果、昨年度と同様に計画以上の実施実績をあげることができ、高校生や高校教員からの評価も良好であった。

この成功は、専門学校と高校が高い頻度で密接にコミュニケーションをとりながら授業を展開してきたことが大きな要因であると考えている。

また、実践的なキャリア教育を提供するための教材やシステムを開発することで、より実践的な授業の提供を実現できている。

本報告書では、これらの取り組みによって高校生が職業に関するキャリアの理解を深め、将来の進路選択に役立っていることを報告する。

この様な想定を超える実績は、高校生と高校教員からのアンケートやヒアリングによる評価結果から判るが、一方で、支援する側の専門学校と企業の労力の大きさは依然として課題となっている。

今後もより効率的な支援方法の策定や、専門学校や企業が担う役割の明確化が求められる。

本報告書では、今年度の成果や課題について報告し、今後の取り組みについても考察している。

そして、専門学校、高等学校、企業等が協力して実現しているこのキャリア教育支援モデルが、今後のキャリア教育の更なる充実に向けた示唆を与えるものとなることを期待する。

第１章　事業概要

第１節　事業の趣旨・目的

本事業では、沖縄県内の専門学校4校が各校の専門分野「商業実務／ビジネス」「商業／情報技術」「工業／自動車整備」「普通／グローバル」と関連する分野の専門高校等と連携し、トータル5年間の一貫型職業教育プログラムの開発と実証による「沖縄モデル」の構築に取り組む。

ここでは学生の中途退学や就職後の中途退社の回避等を目的とし、その主な原因となる職業・職種の理解不足と学業不振について高等学校および専門学校の連携によってアプローチする。前者の職業・職種の理解不足については、高校の段階から専門学校が様々な職業・職種の仕事内容等を教育することで改善できる。また、後者の学業不振については、高校段階での学びの不十分さに対して専門学校が職業・職種で必要となる知識やスキルの教育を高等学校と協力して実施することで改善が図れる。

これらの方策によって、高等学校段階において専門学校での学習に必要な基礎を確立する。さらにこれを土台に、専門学校進学後は各専門分野の応用・実践を身につけると同時に、専門職業人としての人間力やプロ意識を高める教育を実施していく。

本教育プログラムは、4分野の専門学校と連携する高等学校が、それぞれの分野に特化した内容と4校が共同で開発する高校1年次の共通的なキャリア教育などの分野横断的な内容で構成する。こうした高・専連携による一貫型職業教育の実施を通じて、地域社会に貢献できる専門職業人の育成を強化する。

第 2 節　実施体制

事業実施体制として以下に示す構成の「沖専研・高専連携コンソーシアム」を立ち上げることによって本事業を推進する。

●実施委員会

一般社団法人沖縄専門人材開発研究会を代表機関とする実施委員会を本事業の推進組織として編成する。構成機関は専門学校、高等学校、行政機関、企業、業界団体とする。実施委員会は、「事業計画の立案」「実施内容等の重要事項の決定」「事業活動全般のマネジメント」「成果の取りまとめ」と「普及促進」等の役割を担う。実施委員会の下部機関として分科会を置く。

●分科会

実施委員会の構成機関である専門学校と高校の組み合わせの専門分野ごとに分科会を編成する。

各分科会はそれぞれの専門分野の特性等に応じた一貫型職業教育プログラムの開発・実施に係る活動を展開する。また、専門分野を横断する共通的な内容も含まれるため、相互に連携・協働する。

●コーディネーター

コーディネーターは、事業の全体調整や進捗管理、高校と専門学校、企業、行政機関などとの橋渡し、広報を事務局と連携しながら担当する。

●事務局

事務局は、実施委員会、分科会、コーディネーターの運営補助をはじめとする事業活動全体の事務作業を担当する。

本事業における構成機関は以下の通りである。

（1）高等学校

名称・学科		役割等	都道府県名
1	沖縄県立八重山商工高等学校・商業科	実証	沖縄県
2	沖縄県立石川高等学校・普通科	実証	沖縄県
3	沖縄県立美来工科高等学校・自動車工学科	実証	沖縄県
4	沖縄県立中部商業高校・情報ビジネス科	実証	沖縄県

（2）行政機関

名称		役割等	都道府県名
1	沖縄県教育庁県立学校教育課	連携協力支援・評価	沖縄県

（3）専門学校

名称		役割等	都道府県名
1	専門学校那覇日経ビジネス	開発・実証	沖縄県
2	専門学校ITカレッジ沖縄	開発・実証	沖縄県
3	専修学校パシフィックテクノカレッジ	開発・実証	沖縄県
4	専門学校琉美インターナショナルビューティカレッジ	開発・実証	沖縄県
5	琉球調理製菓専門学校	開発・実証	沖縄県

（4）企業

名称		役割等	都道府県名
1	一般社団法人 沖縄専門人材開発研究会	事業統括	沖縄県
2	石垣エスエスグループ	開発・実証	沖縄県
3	株式会社オーシーシー	開発・実証	沖縄県
4	沖縄トヨタ自動車株式会社	開発・実証	沖縄県
5	沖縄 UDS 株式会社	開発・実証	沖縄県
6	株式会社日建ハウジング	開発・実証	沖縄県
7	一般社団法人 沖縄県専修学校各種学校協会	実証評価	沖縄県

（5）コーディネーター

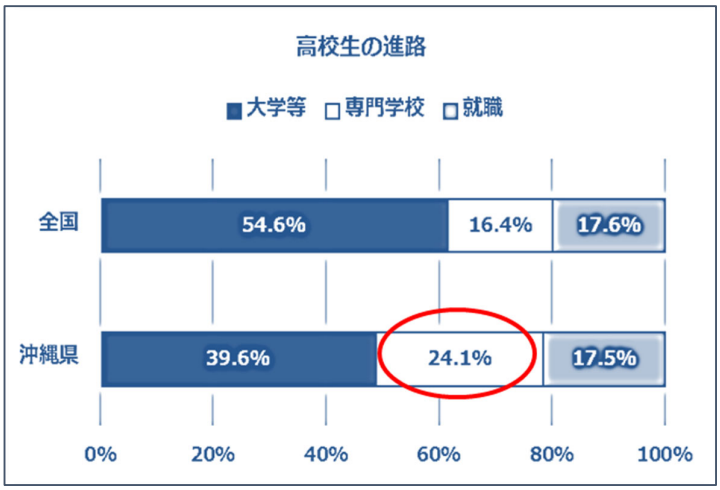
名称		所属・職名	都道府県名
1	川畑　三矢	専門学校那覇日経ビジネス・学校長 （沖縄県立高校元校長）	沖縄県

第 3 節　事業背景

●専門学校への進学者が多い沖縄県

沖縄県では、高校卒業後の進路として専門学校を選択する生徒が多い（下グラフ）。具体的には、専門学校進学率は 24.1%で、これは全国平均の 16.4%よりも 7.7 ポイント高く、都道府県別でも新潟県の 26.0%に次いで2番目に多い。

一方、大学等への進学率は約4割だが、その半数近くが県外の大学等に進み多くが首都圏や関西圏等の県外で就職していく。これに対して、専門学校に進学する生徒は県内で就職するケースが多い。



●横ばいで推移する県内の高等学校卒業生

（若い世代の育成が県の発展に向けた重要課題）

少子高齢化が加速している中、沖縄県は全国でも数少ない人口増加県であり、国内で最も 65 歳以上の高齢者人口が少なく、14 歳以下の年少人口の割合が高い県である。

沖縄県企画部の推計によれば、2016 年の高校卒業生は 14,234 人で、その人数は 2033 年までほぼ横ばいで推移するものと見込まれている。このような人口動態予測について、県が策定した「沖縄 21 世紀ビジョン基本計画」の中間評価では「沖縄県は潜在的な成長性を有しており、今後の沖縄の発展にとって若い世代の育成は極めて重要」と指摘している。

●専門学校が果たす役割の増大　職業教育のさらなる充実化へ

今後 20 年近くに亘って若い世代が横ばいで推移していく中、県内の専門学校へ進学し卒業後も県内で就職していく者が多いという現状を踏まえると、専門学校が県・地域に果たす役割は大きく、その重要性を増していくものと考えられる。地域の発展に貢献できる人材を育成する高等教育機関として、職業教育のさらなる充実化の取り組みは重大な責務である。

●専門学校教育の充実化に向けた課題

専門学校教育のさらなる充実化を図る上での課題が「中途退学の回避」と「就職後の早期離職の回避」である。特定の職業・職種に就くことを希望して専門学校に入学してくる生徒が、専門知識・スキルを身につけ、就職していくという学修と就職のプロセスの途中でリタイアすることなく、継続できることを支援する方策の徹底が必要である。

中途退学・早期離職する理由・原因は様々である。職業・職種の仕事内容やその専門分野を適切に理解・認識できていない「職業・職種の理解不足」、教育課程での学習についていけないという「学業不振」、その他、経済的な理由や健康上の理由などがある。これらのうち「職業・職種の理解不足」と「学業不振」については、高校と専門学校、企業の有機的連携というアプローチによって改善や解消に向けた効果があると考えられる。

●「職業・職種の理解不足」への対応方策

専門学校での学習は、特定の職業・職種に就くことを目的としているため、入学生の多くは目的意識や就職意識が比較的明確である。しかしながら、社会人経験がないこともあって、職業・職種に対して理解不足であったり、誤解を抱いたりしたまま入学してくるケースも少なくない。職業・職種を表向きの面だけで判断し、裏側に隠れているプロとしての大変さやそれゆえの面白さにまで理解や想像が及ばないことがある。高校生にとって身近に感じられる職業・職種であっても理解不足や誤解は生じることもある。

このような理解不足や誤解の解消に向けて、高校の早期の段階から、専門学校が様々な職業・職種の仕事内容やその魅力、大変さと面白さを分かりやすく伝えていくことは極めて有効である。もちろん、高校でも進路指導やキャリア教育の取り組みが

様々な工夫によって実施されているが、これに職業教育を旨とする専門学校が協力することで、その内容はより一層充実したものとなる。

生徒の職業・職種に対する理解のミスマッチの改善につながるはずである。

●「学業不振」への対応方策

専門学校での学びは、高校3年間での学びを土台として積み上げていく部分もある。専門学校に入学してから学業不振となってしまうのは、高校での学びの基礎がしっかりと構築されていないことによるケースが多々見受けられる。

例えば、情報技術系の専門学校では、高校で履修する数学の一部が土台となる。

また、美容の専門学校の場合は化学が必須となっているなど、高校の授業の一部と専門学校の専門的な学習には接点があるが、高校での勉強がおろそかであると、それが要因となって学業不振になってしまうこともある。

このような現状に対して、専門学校がその職業・職種に必要な科目の補習を支援するという方策がある。科目全体を学び直すのではなく、必要な部分を中心に扱い「職業・職種のための基礎学力」を養う。これにより、専門学校での学習を支える基盤を形成し、学業不振の要因の1つを取り払う。

●「職業・職種の理解不足」「学業不振」への対応策は専門学校教育の質向上にも有効

上記の方策は、職業・職種の理解不足と学業不振による中途退学を回避することが直接の目的である。しかしそれだけでなく、こうした高等学校と専門学校、そして企業が連携した職業教育の実践は、生徒の職業意識や専門基礎学力の向上という効果をもたらすことから、結果として専門学校教育の質の向上という効果にもつながっていく。当然、受け入れる専門学校は、生徒の高校段階での学習成果を土台に、それをさらに発展させる職業教育を展開できることになる。

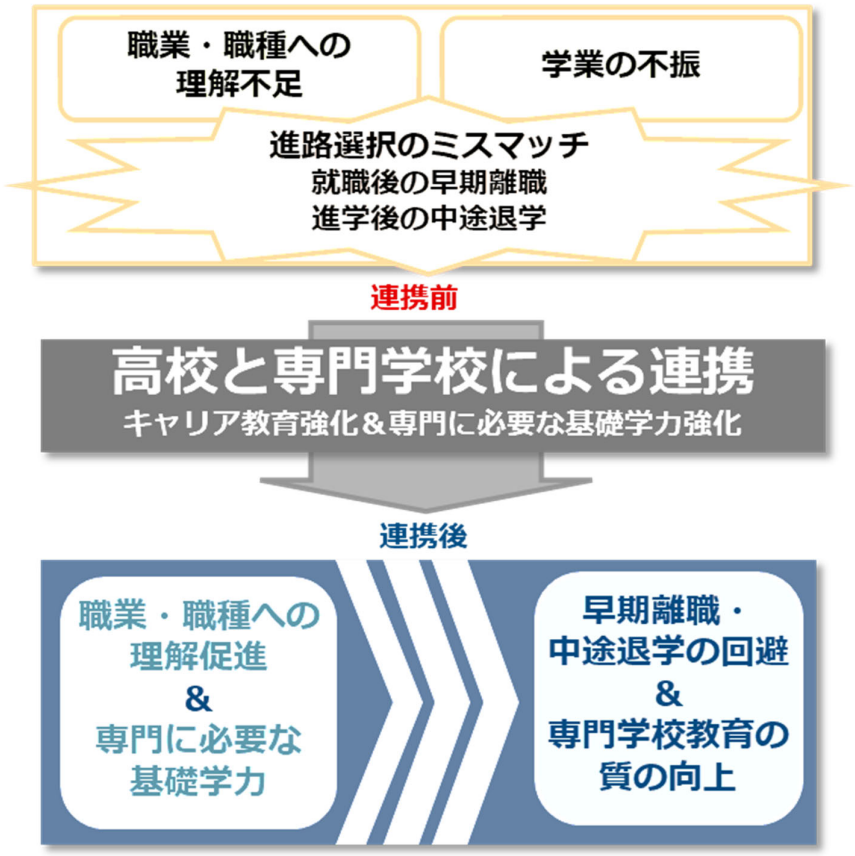
●高・専の有機的連携による課題の解決 −沖縄県のこれまでの高・専連携の実績を基盤として−

今後、専門学校が地域社会の発展に貢献できる人材を育成していくためには、高等学校と密に連携した3年＋2年の一貫型職業教育を実践していく必要がある。専門学校進学率が高い沖縄県では、多くの専門学校が「高校向けの出前授業メニュー」を取り揃えるなど、これまでに高校と連携してきた様々な実績があり、良好な信頼関係

が構築されている。これを基盤とすることで高・専の有機的な連携に基づく実効性の高い一貫型職業教育プログラムの実現が強く見込まれる。

●多分野での高・専連携の意義　−総合的で柔軟な対応ができる可能性を増大する−

本会の本事業で連携している4分野の専門学校は、それぞれ連携する高等学校と分野特化した教育プログラムを開発・実証する。また、高校1年次のキャリア教育や専門学校でのプロフェッショナル教育などでの共通性の高い部分については4校がそれぞれの特性を生かし協力して事業を推進する。多分野での高等学校と専門学校の連携は、高校生が柔軟に進路を選択できる余地を拡大することになる。また、さらに多くの他分野の参画も容易にできる受け皿としてのモデル構築もしやすい。



第 4 節　事業内容概説

本事業では、専門高校と専門学校の連携による5年間の一貫型職業教育プログラムを開発・実施する。その取組は、沖縄専門人材開発研究会の構成機関である専門学校 5 校が県内の高等学校、企業、行政機関との連携の下で推進していく。具体的には「ビジネス」「情報技術」「自動車整備」「グローバル」で、各専門分野と関連する専門高校や普通高校等と連携していく。

専門分野別に連携することにより、各専門分野の特性や学習内容、目標とする人材像などに応じたカリキュラム等の在り方を検証し、高等学校での「専門基礎」から専門学校での「応用・実践」までを系統的に学修する一貫型職業教育プログラムの実現とそれを実施するための一貫型職業教育支援プラットフォームを整備していく。

●一貫型職業教育プログラム

高校専門学科段階では、専門基礎として以下の図表に示す学習テーマと手法に沿った教育プログラム（カリキュラムや教材等）を各学年で段階的に提供する。

この教育プログラムは、専門学校での学びを支える基盤を形成していく。「総合的な学習の時間」や職業に関する教育を行っている授業科目、授業時間外などを候補とし、各校のカリキュラムと運営状況や要求などに応じて実施科目を決定する。

専門学校段階では、専門知識・技術を学ぶ正規カリキュラムに加えて、専門職業人としての人間力や職業意識等を培う教育を実施する。

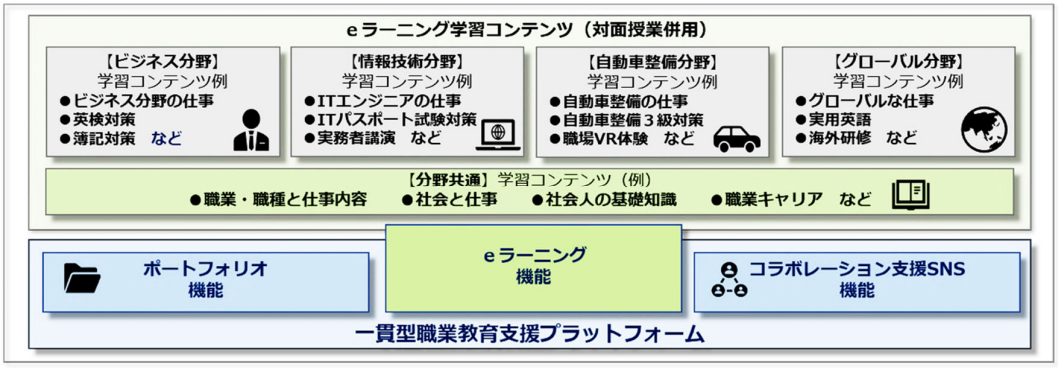


●一貫型職業教育支援プラットフォーム

一貫型職業教育プログラムを機能的で柔軟性をもって実施するためには、生徒・学生、教員・実務者の協働を支援する一貫型職業教育支援プラットフォームが必要となる。eラーニング、ポートフォリオ、SNSなどで構成したシステム環境を整備し教育プログラムのコンテンツを搭載する。

●一貫型職業教育支援プラットフォームの構築と運用

一貫型職業教育プログラムの実施を支援するプラットフォームをクラウド環境上に構築する。その目的のひとつは、5年間の一貫した学びを継続し着実な学習成果に到達できるように、教員による個別対応・指導を充実化させることである。さらに、本事業の学習コンテンツを生徒や学生が柔軟に利用できるようにすることである。



●機能・活用方法

①eラーニング機能と学習コンテンツ

対面授業のテキストに加えて、分野共通・専門分野別に学習コンテンツ（e ラーニング教材）を提供する。資格対策や企業人等による講演映像（ライブ型・オンデマンド型）などのコンテンツを用意する。また、VR による疑似体験など最新テクノロジーを活用したコンテンツも整備する。これらのコンテンツは予習・復習の自己学習だけでなく、一部は対面授業でも活用する。

②ポートフォリオ機能

生徒・学生の学習成果物や学習コンテンツの学習進捗データ等を蓄積・管理し、教員が個別指導を行う際にその判断材料を提供する。高校の教員と専門学校の教員がポートフォリオ機能を介することで、生徒・学生に対する一貫した個別指導をサポートする。また、生徒・学生同士が相互評価などを行うことによって、学習成果を高めることにも利用される。

③コラボレーション支援 SNS 機能

高校の教員、専門学校の教員、企業等の実務者らが職業教育の内容や指導目標などについて、意見交換や情報共有を行う。ここでのコラボレーションを通じて、教員の職業教育力の向上を図っていく。

第 5 節　今年度における取り組み概要

第 1 項　実施委員会・各分科会・個別協議の開催

沖縄専門人材開発研究会、専門学校、高等学校、企業、業界団体等から編成される実施委員会を開催している。

また、実施委員会の下部機関として、主に専門学校、高等学校の教員を中心とした分科会を実施している。

分科会については、今年度は「ビジネス（IT）分野分科会」「グローバル分野分科会」「情報技術分野分科会」の合計3つを実施している。開催回数については、各分科会の状況に応じて開催している。「自動車整備分野」については、分科会は実施していないが、個別打ち合わせで対応した。

第 2 項　開発

今年度の開発対象は、大きく分けて4系統である。

まず、カリキュラムについては、今年度の実証講座対象学年である各分野の高校1～3 年生用を開発した。併せて、次年度以降での実証講座実施を想定している専門学校1年生段階についても今年度版のカリキュラム案を設計した。

教材開発では、事業期間終了後も見据え、昨年度および今年度各分科会のもと実施した実証講座においてそれぞれの専門学校や企業の担当者が授業で活用するために作成した教材およびなどをもとに、モデル教材の開発を行った。

また、e ラーニングの追加開発として、記述式問題のスライド化および動画化を行った。

さらに、一貫型職業教育プラットフォームの整備では、事業期間終了後も高校と専門学校が連携を生み出すことを目的として、昨年度までに構築したシステムの追加カスタマイズを行った。具体的には、連携授業の要望やアプローチを支援する生成 AI を活用したチャット機能と、そのチャットの内容と沖縄県内の高校と専門学校の情報を RAG 機能によってマッチングすることを可能とした。

その他、モデル教材を実際に授業で活用する際のガイドとなる教員研修教材や、本事業にように産学連携を推進していく際の基礎資料となる教員用ガイドの本格開発も行った。

第 3 項　実証講座

今年度の実証講座は、「ビジネス(IT)分野」「自動車整備分野」「グローバル分野」「情報技術分野」の 4 分野で実施してきた。年間を通して 4 分野の高校1～3 年生を対象に総計 144 コマを実施した。

「ビジネス(IT)分野」では、県立八重山商工高校において、高校 1 年生が「ビジネス基礎」、高校 2 年生では「ネットワーク活用」、高校 3 年生は「総合実践」で連携授業を実施した。

専門学校は、専門学校 IT カレッジ沖縄が連携して実施した。1 年生のビジネス基礎においては、「第 4 章 さまざまなビジネス」について教科書を使って各業界のビジネスについて学習した後に、島内外の各業界で働いている実務者を講師として招き、さらに理解度を深められる授業を実施した。

「グローバル分野」では、県立石川高校にて高校 1～3年生全員（各4クラス）を対象に、1 年生では「情報Ⅰ」「総合的な探究の時間」の時間にて連携授業を行った。「情報Ⅰ」に即するテーマを基本として、コミュニケーションや表現方法、グループワークでの動画制作、さらには観光分野をはじめとして、様々な分野の企業人を招いて職業人講話を行った。2 年生では、「総合的な探究の時間」を活用して生徒自身が関心を持った企業への訪問を通じて、職業意識の深化に関する授業を実施した。そして、3 年生では、専門学校生による講話やこれまでの学習を通しての自身が考えるキャリアのプレゼンテーションを実施した。

「情報技術分野」では、中部商業高校にて、高校 1 年生総合ビジネス科（3 クラス）および国際ビジネス科（1 クラス）の計 4 クラスを対象に、「ビジネス・コミュニケーション」の時間にて、ビジネスマナーに関する連携授業を行った。さらに、2 年生情報ビジネス科（2クラス）を対象に「課題研究」の時間にて、国際ビジネス科 2 年生・3 年生（各1クラス）を対象に、「総合実践」の時間にて、動画制作の連携事業を実施した。連携した専門学校は、専門学校 IT カレッジ沖縄、沖縄ビジネス外語学院、専門学校日経ビジネスである。基本的な授業の進行は、高校の教員が行い、専門学校の教員が技術面や専門分野について学習の支援などを行った。

これらに関する具体的な活動実績については、第 4 章にて紹介する。

第 4 項　教員研修

教員研修は、今年度グローバル分野にて、モデル教材の活用に関しする内容で専門学校と高校の教員で1回実施した。また、研修教材の追加開発として、モデル教材を活用する際の講師用の指導ガイドを開発した。

併せて、高専連携事業を実施していくうえでの参考資料となる「教員用ガイド」の追加開発も行った。

第 2 章　実施委員会・各分科会の開催

第 1 節　実施委員会

今年度、実施委員会は計3回開催した。実施委員会には、本事業におけるコーディネーターをはじめとして、高等学校の管理職、専門学校や企業の経営層、行政等などが参画し、事業全体のマネジメントや各分科会の実施状況の確認等を行ってきた。

【実施委員会実施スケジュール】

回数	日時	内容
第 1 回	2025 年 7 月 30 日	・委員長挨拶 ・昨年度の実績振り返り ・今年度事業スケジュール説明 ・令和 7 年度連携授業実施報告 ・意見交換
第 2 回	2025 年 12 月 9 日	・委員長挨拶 ・各分科会における連携授業実施報告 ・今年度開発状況報告 ・高専連携支援システム構想説明 ・意見交換
第 3 回	2026 年 2 月 12 日	・委員長挨拶 ・各分科会における連携授業実施報告 ・今年度開発状況報告 ・今後の事業展開 ・意見交換

第 2 節　各分科会の開催

今年度は、昨年度から継続的に開催している「ビジネス(IT)分野」「グローバル分野」「情報技術分野」にてそれぞれ開催した。

以下、各分科会の活動実績について紹介する。

【各分科会開催概要】

	ビジネス(IT) 分野分科会	グローバル 分野分科会	情報技術 分野分科会
開催回数 (事業期間外含む)	3 回	4回	4 回
連携授業 実施主体校	沖縄県立 八重山商工高校	沖縄県立 石川高校	沖縄県立 中部商業高校
連携授業 対象科目	「ビジネス基礎」 「ソフトウェア活用」	「情報Ⅰ」 「総合的な探究の時間」	「ビジネス・コミュニケーション」 「課題研究」 「総合実践」
連携した 専門学校	・専門学校 IT カレッジ沖縄	・専門学校日経ビジネス ・琉美インターナショナルビューティカレッジ ・専門学校 IT カレッジ沖縄 ・琉球調理製菓専門学校	・専門学校 IT カレッジ沖縄 ・沖縄ビジネス外語学院 ・専門学校日経ビジネス
協議概要	・実証講座に関する内容やスケジュールの調整 ・実証講座時の様子の確認		

第 3 章　開発

第 1 節　カリキュラム設計

カリキュラム設計は、「ビジネス（IT 分野）」、「自動車整備分野」、「グローバル分野（普通科）、「情報技術分野」の４つの分野で推進した。高校１～３年生のカリキュラム設計は、昨年度までの実施内容を基準に連携授業を実施と並行して設計している。さらに、次年度以降での実施を想定した専門学校段階のカリキュラム案も設計した。

主に分科会にて高等学校、専門学校および企業等が行った協議をもとに、カリキュラムを策定した。

第 1 項　高等学校1年生用カリキュラム

まず、ビジネス（IT）分野の高校１年生用のカリキュラムは、「ビジネス基礎」の単元に沿って設計している。専門学校や企業が支援可能な単元や章などにおいて連携授業を運用しつつ、カリキュラムの調整及び具体化に取り組んだ。

次に、自動車整備分野における高校１年生用のカリキュラムは、座学の科目である「自動車工学」と実習などを行う「実習」を対象に設計している。

グローバル分野においても、昨年度までの実績をもとに普通科の科目である「情報Ⅰ」及び「総合的な探究の時間」での連携授業実施を想定し、その内容と整合性の良いキャリア教育関係の内容とした。

情報技術分野の高校１年生用のカリキュラムは、今年度初めての実施であった「ビジネス・コミュニケーション」の単元に沿って新規設計を行った。

第 2 項　高等学校2年生用カリキュラム

高校２年生用のカリキュラムは、主に令和４年度の後期から分科会を通して、協議を開始し、令和５年度から実施している内容を基礎としている。今年度も連携授業を実施しながら分科会や個別協議を行い策定した。

ビジネス（IT）分野においては、連携授業科目は「ソフトウェア活用」である。その中の単元である「第３章　表計算ソフトウェアの活用」を活用して合計１０コマのカリキュラムとなっている。テーマとしては、地元の高校を卒業した先輩の進路状況を分析である。実施項目は、情報の収集や整理、集計・グラフ化、分析、発表となっている。

自動車整備分野では、高校 1 年生と同様に、座学と実習での連携授業の実施を想定した内容で構成している。

グローバル分野においては、過年度と同様に「職業理解の深化」がテーマである。具体的には、関心分野別に企業訪問及びグループワーク、成果発表会を実施するカリキュラムである。

情報技術分野においては、これまでの事業期間にて「総合実践」の科目内にて連携し実施した職業人講話と課題解決型学習をもとに開発している。

第 3 項　高等学校3年生用カリキュラム

高校3年生用のカリキュラムについては、昨年度および今年度の実施内容や分科会、個別の協議を通して設計した。

ビジネス(IT)分野においては、連携授業科目は「総合実践」で合計 30 コマのカリキュラムである。高校が所在する石垣島の魅力を PR する動画の作成をテーマとしたプロジェクト学習である。授業は、基本的に高校教員が進行し、学習の開始段階や中間報告、最終発表会などの要所で専門学校が支援する形式を想定したカリキュラムである。

自動車整備分野については、昨年度の実施内容を基に、座学と実習の科目で構成している。

グローバル分野は、高校2年生段階と同様に「総合的な探究の時間」での実施を想定したカリキュラムである。1年次に「情報Ⅰ」で実施してきた「様々な職業への理解」、2年次の「職業理解の深化」からの系統的な繋がりを意識し、3年次は進路選択をテーマとしている。具体的には、卒業生の進路選択に関する講話のほか、生徒自身が進路選択における学びを発表する成果発表会などから構成される。

情報技術分野においては、昨年度に「ネットワーク活用」の科目内で実施した課題解決型学習の内容をもとに作成している。

ここまで高校1～3年生までのカリキュラムについて紹介した。今年度では、昨年度までに開発したカリキュラムの調整とともに追加開発も行った。

追加開発については、これまでに開発したカリキュラムに基づき、運営面の体系的な整理・高度化を図った。昨年度は、教育内容を中心とした構成であった。今年度は講座全体の実施目的や教育的意義を追加項目とした。

主な追加開発項目は以下の 7 点である。

【カリキュラム追加開発事項一覧】

主な追加項目	内容
① 実施の目的	過去の実証講座で得られた生徒の変容、教員・連携機関からのフィードバックを踏まえ、本事業の目的をより具体的な観点から再整理した。
② 実施のポイント	実証期間中に明らかになった効果的な取組や留意点を整理し、各講座共通の実施ポイントとして明文化した。
③ スケジュール	実証講座の実績から、関係者間における認識共有と円滑な運営のために前後のスケジュールを整理・明確化した。

④ 事前準備	実証講座における事前準備について、段階別に整理し、講座開始前の準備不足による課題を防止する目的で整理した。
⑤ 専門学校・企業との確認・調整	調整事項を明確化し、事前確認事項をとりまとめ、連携機関との協働体制をより安定的なものすることを目的に、整理した。
⑥ 実施期間中の運営	講座の質を維持しながら安定的な運営を可能とすべく、実施中に必要となる運営面の対応を整理した。高校・専門学校・企業等が様々な状況にも柔軟に対応できるよう、事前に一定のコンセンサスをえるためのポイントを明示した。
⑦ 事後対応	実証講座の取り組み成果を検証すべく、令和6年度では明確に整理されていなかった事後対応について新たに整理することで、継続的な事業改善につなげられるよう整えた。

以上の追加開発により、教育内容・運営体制・連携調整の各側面を体系的に整理し、これまでの実証講座の成果を踏まえた再現性・継続性が比較的高いカリキュラムとした。

本事業は、高等学校と専門学校が有機的に連携するモデルを構築することが目的であり、これまでの連携授業での実績によるノウハウを盛り込むことによって、より完成度を高めたといえる。

来年度においては、高校や専門学校と分科会などを通して最終調整を行うことを想定している。

開発したカリキュラムの一例として、今年度に新規開発した情報技術分野の１年生用カリキュラムを次項に提示する。

また、各分野のカリキュラムについては、付録にて紹介する。

【情報技術分野の１年生用】

高専連携事業　情報技術分野 高校1年生用カリキュラム

主な想定対象校：高等学校（商業科：情報ビジネス科）

＜高専連携事業における教育目標＞

・地域課題や地域政策を反映したカリキュラムの開講を通して、実社会や日常生活、地域社会との結びつきを深める
・地域産業や地域活動への参画が、地域振興にいかに重要かを体験的に学習できる機会を提供する
・社会経済活動への参与の意義を見出す機会を提供する
・それぞれの資源や強みを、生徒の学びや進路選択のあり方にプラスの影響を与えられるよう、各関係機関・団体が体系的、かつ継続的に参画する

＜育成を目指す資質・能力＞

・自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、より良く問題を解決する資質や能力
・学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探求の活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方、生き方を思考できる資質や能力
・各教科・科目及び特別活動で身につけた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において活かし、それらが総合的に働くようにする資質や能力

＜情報技術分野の目標＞

情報技術の実務における課題を発見し、創造的に解決するなど、情報技術を通じて、地域産業をはじめとする経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を身につける

＜1年生の目標＞

・マナー実践を通して自己の行動を振り返り、より良い態度や表現を意識的に身に付けようとする姿勢を育成する
・ビジネスマナーが商業分野の学習や将来の進路（就職・進学）につながる基礎であることを理解する
・挨拶・お辞儀・身だしなみ・立ち居振る舞いが、相手との信頼関係や印象形成に与える影響を理解する
・丁寧な言葉遣いや敬意を表す表現を学び、相手や場面に応じたコミュニケーションの基礎を習得する

＜教育内容と方法＞

連携対象科目	「ビジネス・コミュニケーション」
コマ数	最大3コマ程度　※各校の実施可能コマ数などに応じて実施されることを想定
指導方法	情報収集、整理、分析、表現に関する思考力、判断力、表現力を身につける学習活動において、適切なデータを収集し、適切な方法で整理・分析・表現できるよう指導・支援をする ※外部協力者（専門学校や企業など）が参加の場合には、TTでの実施を想定する
教材	授業担当者作成の教材または高校2年生用のモデル教材を活用する

＜2年生段階実施項目一覧＞				講師			連携		備考
学習活動：	科目	コマ数	テーマ	高校	専門学校	企業他	専門学校	企業他	
実施項目	ビジネス・コミュニケーション	1	挨拶、お辞儀、身だしなみ	○	◎		◎		・◎主担 ○支援 ※基本的には高等学校教員が進行し、専門的な知識・知見が必要な際に、専門学校や企業等が参加
	ビジネス・コミュニケーション	3	歩き方、座り方、言葉遣い	○	◎		◎		

＜学習内容例＞

テーマ	内容	
ビジネスマナー１	挨拶、お辞儀、身だしなみ	
ビジネスマナー２	歩き方、座り方、言葉遣	

＜必要機材等＞

・タブレット端末　・プロジェクター　・PC　・HDMI接続機器　　など

<table>
<tr><td rowspan="5">各機関の役割</td><td>〈高等学校〉</td></tr>
<tr><td>・年間指導計画の立案とともに、科目内でのキャリア教育の観点を明確化する
・専門学校や企業などの外部協力者への依頼事項（授業時間や内容など）を整理する
・授業時などにおける生徒の様子や状況を協力者に共有する</td></tr>
<tr><td>＜専門学校＞</td></tr>
<tr><td>・地域の理解・評価を得ながら、地域における質の高い職業教育機関として教育活動を展開する
・地域政策や人材の需要の変化に対応したコースを開講し、地域の人材ニーズに応える
・出前講座をはじめとした、進路選択前におけるキャリア教育・職業教育により、多様なキャリアパスに対応した教育・指導を行う</td></tr>
<tr><td>＜企業等＞</td></tr>
<tr><td>・絶えず変化する環境への適応力や、問題解決能力の向上の重要性を指導する
・基礎知識と技術的・科学的素養、リーダーシップやマネジメントなどのヒューマンスキルの重要性を指導する
・技術的な面だけではなく、視点の広がり、柔軟性、研究活動などでの仕事のまわし方等を含む体験的実習を実施する
・体験的実習やバランスンスの取れた情報提供を通じ、ミスマッチングを減らし人材の定着化を促進する</td></tr>
<tr><td>実施の目的</td><td>・ビジネスマナーが商業分野の学習や将来の進路に直結する重要な要素であることを理解させる
・働く場面を想定したマナー学習を通じて、社会の一員としての自覚や責任意識を養う
・挨拶や身だしなみ、立ち居振る舞いなど、社会で求められる基本的なマナーを理解させ、ビジネスマナー教育の基礎を築く
・相手を意識した態度や言葉遣いを学ぶことで、良好な人間関係を構築するための基礎的なコミュニケーション力を育成する</td></tr>
<tr><td>実施のポイント</td><td>・現場経験に基づく具体例を取り入れ、学習内容の現実性と説得力を高める
・見て学ぶだけでなく、実際に動作や発声を行うことで、マナーを体感的に身に付けさせる
・難解な理論に偏らず、挨拶・所作・言葉遣いといった基本事項を丁寧に指導する
・将来の職場を想定し、実生活に結び付けて理解できるようにする</td></tr>
<tr><td>スケジュール</td><td>
<table>
<tr><td></td><td colspan="2">中長期連携講座前</td><td>実施期間中</td><td>実施後</td></tr>
<tr><td>日程</td><td>3～4ヶ月前
打合せ1</td><td>1~2週間前
打合せ2</td><td>随時</td><td>1週間後</td></tr>
<tr><td>確認事項</td><td>・実施日
・テーマ
・教室
・使用機器
・事前アンケート要否
・中間発表・成果発表</td><td>・構成</td><td>・理解度
・習熟度
・課題提出状況
・スケジュール</td><td>・アンケート結果精査</td></tr>
<tr><td>準備物</td><td></td><td>・事前アンケート</td><td>・教材
・フィードバック</td><td>・授業後アンケート</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>事前準備</td><td>・出前講座の目的（どのような学びを提供するか、目標を明確にする）
・専門学校等との打ち合わせ日程調整
・カリキュラム内容の確認（授業の流れ、評価方法、成果物等）
・授業の形式決定（対面・オンライン・ハイブリッド）
・実施スケジュールの作成（時間割への組み込み、日程調整、予備日）
・予算の確認（交通費、教材費、講師謝礼等）
・生徒の募集・選抜方法の決定（選択制か全員参加か）</td></tr>
<tr><td>専門学校・企業との確認・調整</td><td>・授業担当者の確定（専門学校側の講師・スタッフ・職業人講話担当者）
・担当者との事前打ち合わせ（授業内容や役割分担の確認）
・外部支援講師（追加支援）
・連携授業のルール・マナーの共有（服装・持ち物・注意事項）
・事前課題
・事前調べ学習
・中間発表・成果発表の実施有無
・事前アンケート
・必要な教材・設備の確認（プロジェクター、PC等）</td></tr>
<tr><td>実施期間中の運営</td><td>・会場準備（座席配置、設備チェック）
・生徒の出欠管理（点呼、遅刻・欠席者対応）
・講師のアテンド（学校への案内、控室の確保等）
・授業の進行確認（予定通り進められるか、サポートが必要か）
・生徒のフォロー（質問対応、理解度・習熟度・課題提出状況のチェック）</td></tr>
<tr><td>事後対応</td><td>・生徒の振り返り
・講座後アンケート
・講師・専門学校との振り返り会議（改善点・今後の継続に向けた話し合い）
・レポート・成果物の整理・発表
・次年度に向けた課題の整理
・学内への成果報告</td></tr>
</table>

第 4 項　専門学校1年生用カリキュラム

令和 8 年度以降に専門学校へ進学する学生を対象とする教育プログラムのカリキュラム案を具体化した。今年度では、これまでの高校 1～3 年生対象の実証講座の蓄積を踏まえ、専門学校との個別協議なども行いながら実施案の検討を進めた。

具体的には、各専門学校が独自で実施している就職活動を支援することを目的とした就職活動演習である。

次年度以降の実施に向けて、各専門学校をはじめ事業関係者と実施内容や規模などについて協議を継続していく。

以下は、専門学校 1 年生段階におけるカリキュラム案である。

【専門学校段階　就職活動演習(案)】

<table>
<tr><td>1</td><td>オリエンテーション</td><td>就職活動オリエンテーション・マナー</td><td rowspan="4">学校
or
事務局</td></tr>
<tr><td>2</td><td>対人関係</td><td>コミュニケーション基礎</td></tr>
<tr><td>3</td><td rowspan="2">自己理解</td><td>価値観と長所</td></tr>
<tr><td>4</td><td>経験の振り返り</td></tr>
<tr><td>5</td><td rowspan="3">仕事理解</td><td>企業が求める人材</td><td rowspan="2">企業</td></tr>
<tr><td>6</td><td>業界の見方</td></tr>
<tr><td>7</td><td>会社研究、求人情報の収集</td><td>AI</td></tr>
<tr><td>8</td><td rowspan="2">就職支援①</td><td>志望動機・自己 PR の作成</td><td rowspan="2">AI
（企業）</td></tr>
<tr><td>9</td><td>応募書類の対策</td></tr>
<tr><td>10</td><td rowspan="2">就職支援②</td><td>面接対策　基礎</td><td>AI</td></tr>
<tr><td>11</td><td>面接対策　応用</td><td>企業</td></tr>
<tr><td>12</td><td rowspan="3">就職支援③</td><td rowspan="3">グループディスカッション対策</td><td rowspan="4">企業
or
事務局
or
AI</td></tr>
<tr><td>13</td></tr>
<tr><td>14</td></tr>
<tr><td>15</td><td>就職支援④</td><td>入社準備</td></tr>
</table>

第 2 節　教材開発

第 1 項 「高校1年生用」「高校2年生用」モデル教材の評価・追加開発

今年度は、昨年度開発したキャリア教育教材をもとに、授業での活用という観点から高校や専門学校が協力して、モデル教材の評価や追加開発を行った。

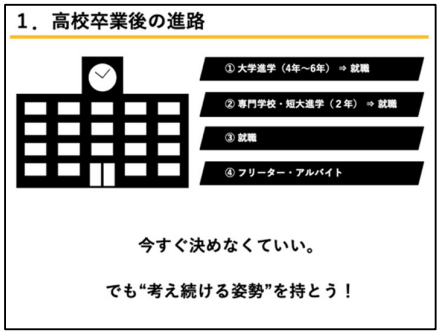
高校 1 年生用モデル教材は、グローバル分野の1教材（7ページ）である。また、追加開発した教材については、PowerPoint のノートにスライドの説明文を追加したうえで動画形式にて視聴可能とした。

以下に追加開発した教材の一部を提示する。

【追加開発した高校1年生モデル教材の事例】

グローバル分野





高校1年生用モデル教材と同様に、人事異動などによる関係者等の変更が生じた際にも継続的な連携授業の実施を見据え、高校2年生用のモデル教材の追加開発を行った。

今年度は、ビジネス（IT）分野、情報技術分野の2分野の追加開発である。背景として、これまでに本事業で連携授業を実施した高校教員より、各校で取り組む場合に確保可能な時間数が異なる場合があり、時間数が異なるバージョンの教材があるとありがたいとの意見があった。

そのため、昨年度までに開発したビジネス(IT)分野および情報技術分野の中長期的に実施することを想定した教材を対象とした。

ビジネス（IT）分野では、昨年度開発した教材（10時間)をベースに、ワークの追加などを軸に拡張版（20時間、PowerPoint　83ページ）の開発を行った。

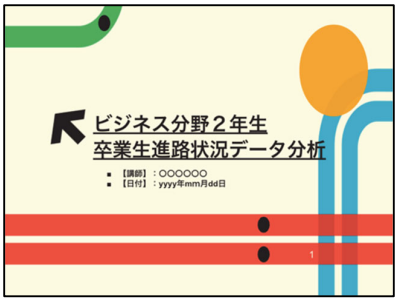
情報技術分野では、昨年度開発した教材（30時間)を基に、短縮版（15時間、PowerPoint134ページ）の開発を行った。

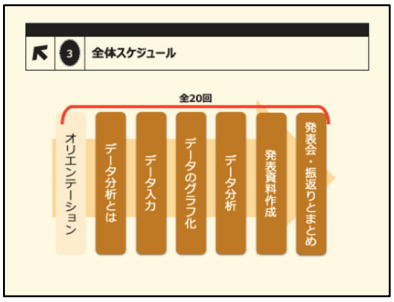
また、追加開発した両教材については、ノート部分に説明文を追加し、動画化も併せて実施した。

以下が追加開発をした教材の一部である。

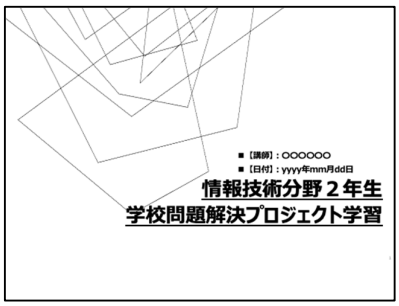
【追加開発した高校2年生モデル教材の事例】

ビジネス(IT)分野





情報技術分野





第 2 項 「高校 3 年生用」モデル教材の開発

昨年度および今年度の連携授業の実施内容をもとに、高校3年生用のモデル教材の新規開発を行った。

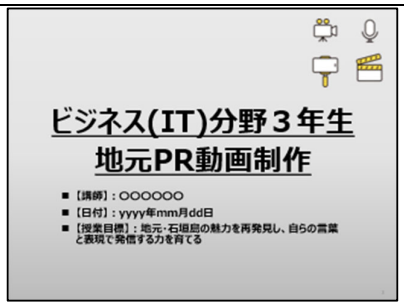
開発した教材は、すべて PowerPoint 形式である。

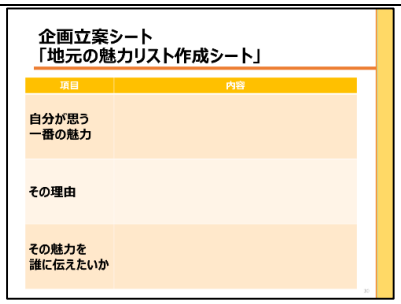
ビジネス(IT)分野は「地元 PR 動画制作」をテーマに82ページ、自動車整備分野は座学と実習の2教材で合計55ページ、グローバル分野は専門学校生講話から進路選択までの4教材で合計72ページである。情報技術分野ついては、昨年度にカリキュラムの設計を目的として開発した資料をベースに「高校のホームページリニューアル企画の考案」をテーマとして、56ページの教材を開発した。また、高校 1 年生、2 年生用モデル教材と同様に、すべての教材でノート部分に説明文を追加したうえで動画化した。

以下に今年度開発した 4 分野それぞれの教材の一部を紹介する。

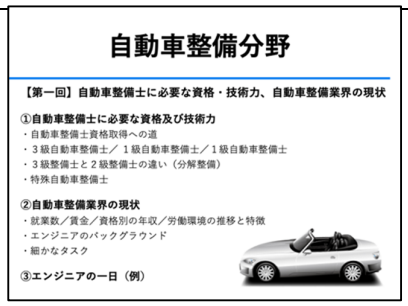
【開発した高校 3 年生モデル教材の事例】

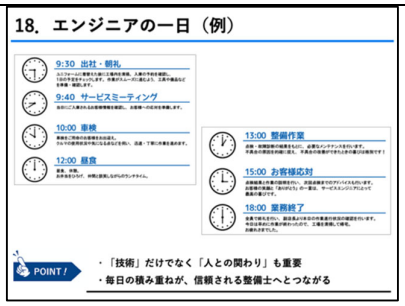
ビジネス（IT）分野





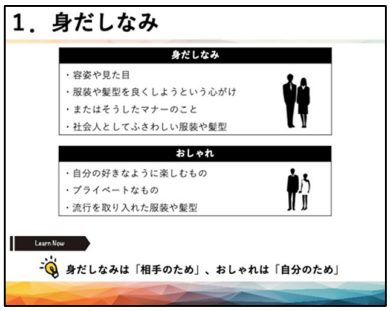
自動車整備分野





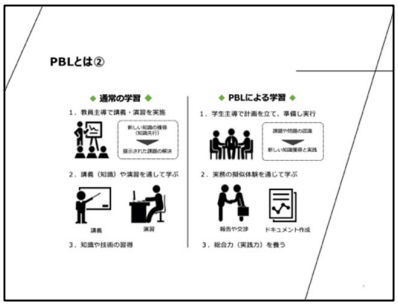
グローバル分野





情報技術分野





第 3 項 「専門学校 1 年生用」モデル教材の開発

専門学校段階における実証講座を想定し、カリキュラムに対応する専門学校用の教材開発を行った。開発の過程においては、実施委員会に参画の専門学校などの意向や要望も含めて行った。教材は、就職活動をテーマとした演習形式で進めていくことを想定している。全15回構成で、スライドは100ページである。

【開発した専門学校 1 年生用モデル教材の事例】





第 4 項　e ラーニング教材などの追加開発とプラットフォームへの実装

令和 6 年度までに開発した e ラーニング教材やモデル教材の評価を行ったうえで、追加開発を行った。

具体的には、昨年度に開発した記述式の問題について、個人学習での活用を想定し、PowerPoint 形式で作成したうえで動画化した。対象は、ビジネス(IT)分野、自動車整備分野、グローバル分野、情報技術分野の4分野であり、各分野10問程度ずつ開発した。開発したスライドは合計76ページである。

追加開発した動画については、プラットフォームでの活用を想定し準備を進めた。

以下、追加開発した e ラーニング教材の一部で紹介する。

【追加開発したスライド】



【動画】



第 3 節　一貫型職業教育支援プラットフォームの整備と追加カスタマイズ

今年度は、主に高等学校や専門学校の教員との協働の創出や実施支援を目的としたシステムの整備およびそれに伴う機能の追加カスタマイズを実装した。

具体的には、連携授業など授業の充実化を希望する高校教員と、自校のリソースを活用して高等学校と連携を図りたい専門学校のマッチングを支援する機能のカスタマイズである。

本事業におけるこれまで取り組みにおいて、専門学校の協力による連携授業の成果から高校側より更なる希望などが出てくる。また、個別協議では、「〇〇の授業をしたいから、〇〇分野の専門学校を紹介してほしい」などの意見もある。

そのような背景から、高校教員は授業の充実化のために専門学校や企業などに協力依頼の希望はあるものの、日々の業務に追われ、要望を整理したうえでの連携実現がうまくできていない現状が推察される。

そこで、プラットフォームが高校側の希望や条件などを整理したうえで、協力や連携の可能性が比較的高いといえる専門学校を提示することにより、高専連携のハードルを下げることが可能である。

また、専門学校側も自校のリソースを活用して高校と連携を図る際に、学科構成など比較的連携意義が高い高校にアプローチすることにより、新たな高専連携の形を作り出せる可能性がある。

このプラットフォームでは、大きく2つの新規性がある。

1つ目は、高校教員側の希望や要望、専門学校側のアプローチを整理するために、プラットフォーム内にて生成 AI を活用したチャットシステムを導入し、それぞれの意向について明確化することを支援する機能である。

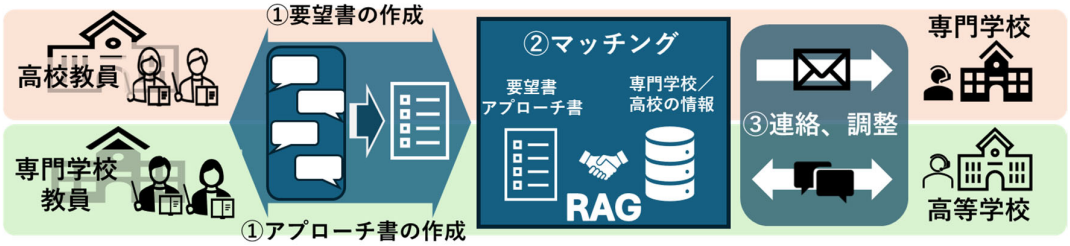
2つ目に、RAG（Retrieval-Augmented Generation）機能を活用し、プラットフォーム内の専門学校、高校の情報をもとにマッチングを図ることである。上記で作成した要望やアプローチの内容と、予めアップロードした沖縄県内の高校、専門学校の情報をマッチングすることにより、沖縄県内かつ親和性が比較的高い学校を候補として提示することができる。

これにより、連携の前段階であるアプローチの負担軽減が見込まれる。次年度において、高校教員などに試験的に活用を依頼し効果を測る予定である。

次項は、開発したプラットフォームの高校教員および専門学校教員が活用する際に流れを表したイラストである。

また、開発したプラットフォームのイメージも提示する。

【開発したプラットフォーム活用イメージ】



【プラットフォーム画面： 上：チャットで生成 AI に相談　下：マッチング機能(マスキング)】





第 4 章　実証講座

第 1 節　実証概要

分科会などで協議してきたカリキュラムのもと「ビジネス（IT）分野」「自動車整備分野」「グローバル分野」「情報技術分野」合計4分野にて合計144コマの連携授業を実施した。

以下にそれぞれの分野の連携授業の実施概要を示す。

【令和 7 年度　連携授業概要一覧】

	ビジネス(IT) 分科会	自動車整備 分科会	グローバル 分科会	情報技術 分科会
連携主体校および企業	○高等学校： ・沖縄県立八重山商工高校 ○専門学校： ・専門学校 IT カレッジ沖縄	○高等学校： ・沖縄県立美来工科高校	○高等学校： ・沖縄県立石川高校 ○専門学校： ・専門学校日経ビジネス ・琉美ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙﾋﾞｭｰﾃｨｶﾚｯｼﾞ ・専門学校 IT カレッジ沖縄 ・琉球調理製菓専門学校	○高等学校： ・沖縄県立中部商業高校 ○専門学校： ・専門学校 IT カレッジ沖縄 ・専門学校那覇日経ビジネス ・専門学校沖縄ビジネス外語学院
対象学年	1～3 年生	2 年生	1～3 年生	1～3 年生

対象科目	「ビジネス基礎」 「ソフトウェア活用」 「総合実践」	「自動車工学」	「情報Ⅰ」 「総合的な探究の時間」	「ビジネス・コミュニケーション」 「課題研究」 「総合実践」
連携概要	1 年生: コミュニケーション、マナー、職業人講話、フィールドワーク 2 年生: データ分析、卒業生講話、映像制作 3 年生: 動画制作	2 年生: 【自動車工学】: 自動車整備士に必要な能力、職業意識	1 年生: キャリア基礎、職業人講話、映像制作 2 年生: マナー、企業訪問 、プレゼンテーション 3 年生: 専門学校生講話、進路に関するプレゼンテーション、マナー等	1年生: ビジネス基礎 2年生: 映像制作 3年生: 映像制作
連携授業総コマ数	1 年生:8 コマ 2 年生:10 コマ 3 年生:30 コマ	2 年生:3 コマ	1 年生:24 コマ 2 年生:12 コマ 3 年生:9 コマ	1 年生:8 コマ 2 年生:4 コマ 2・3 年生合同:2 コマ

以下、各分野の実証講座の概要と様子、アンケートの一部を提示する。それぞれのテーマで実施したアンケート結果の一部について、後述の付録にも掲載している。

第 2 節　ビジネス分野

「ビジネス（IT）分野」では、県立八重山商工高等学校の 1 年生～3 年生を対象として行った。1年生では「ビジネス基礎」、2 年生は「ソフトウェア活用」、3 年生は「総合実践」で実施した。

連携授業で協力をした専門学校は専門学校 IT カレッジ沖縄である。他にも、地元企業等の協力を得て職業人講話などを実施した。

以下は、学年別の今年度実施した項目の一覧である。

【「ビジネス（IT）分野」における連携授業実施項目】

▸1 年生（約 30 名）:「ビジネス基礎」

	テーマ	内容	コマ
①	ビジネスマナー	講義・ワーク・実践	1
②	ビジネスコミュニケーション	講義・ワーク・実践	1
③	職業人講話	事前調べ学習／講話／振り返り	4
④	マーケティング	講義・ワーク	1
		総コマ数	7

▸2 年生（約 30 名）:「ソフトウェア活用」

	テーマ	内容	コマ
①	表計算ソフトウェアの活用	Excel を活用した進路状況分析グループ学習	10
		総コマ数	10

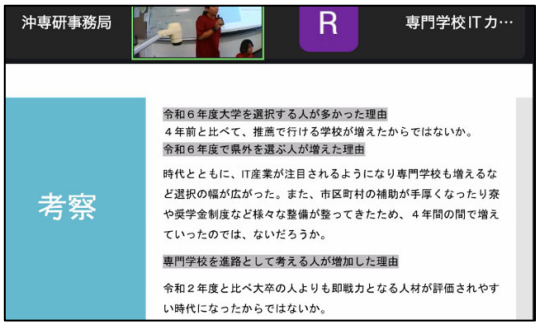
▸3 年生（約 30 名）:「総合実践」

	テーマ	内容	コマ
①	動画制作	石垣島の PR 動画をグループで制作	30
		総コマ数	30

【連携授業の様子　上：1年生　左下：2年生　右下：3 年生】

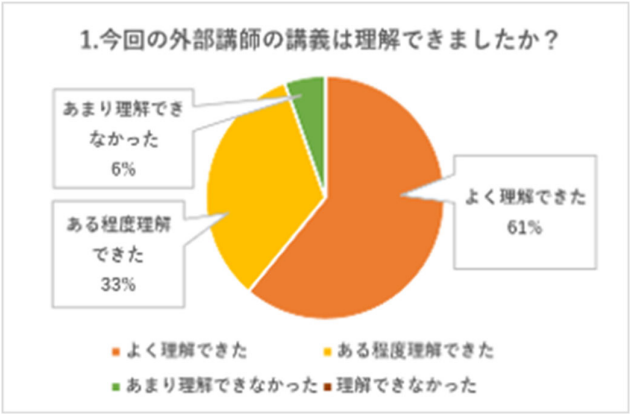


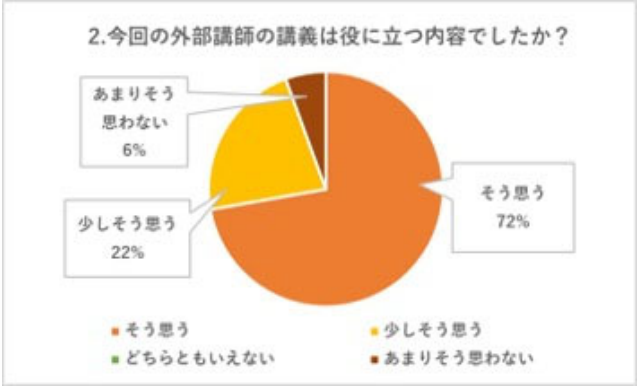






【3年生：授業後アンケート結果】





授業全体を通して、質問や感想など（一部抜粋）

- 今回の授業で動画の取り方のコツや動画の編集の仕方を学ぶことができてよかった。今回学んだことを今後の動画制作に活かせるようにしたい。
- 動画の撮り方が自分は画面が揺れたりどこで区切っていいかわからに部分が沢山あり、高専連携をやって最初と最後の 3 秒は停止するとアドバイスをもらってやってみると二年生のころよりきれいに見やすく動画が取れ、いい勉強になりました。
- 授業でならった、写真撮るときは脇をしめてとるときれいに撮れると習い実際に行ってみるとぶれることなくきれいな写真、動画を撮影することができた。しっかりアドバイスを取り入れることでより良い学校紹介動画が作成できると思った。
- 動画を作成するにあたって必要な素材の上手な撮り方や見る人がわかりやすい撮り方を知れてよかったです。またほかの学校の紹介動画をみて自分たちでアフレコや声を足していたり、テロップだけだったり、英語で書いていたりいろんな工夫の仕方があると感じました。
- 去年の授業で行った動画制作では、動画の構成や見やすさなどをあまり考えずに作っていた部分もあったので、映像を撮るときは広い範囲からどんどん範囲を狭くしていくことや脇をしめて撮影をすることなどこれから動画制作を行っていく中で大切なことを学ぶことができたので良かったと思います。動画にあった BGM の選び方やフォントの選び方なども知りたいなと思いました。

ビジネス（IT）分野 3 年生対象の講座は、地元の石垣島 PR 動画作成がテーマであった。アンケート結果から、授業自体について 9 割以上が今後役立つという回答であった。

第 3 節　自動車整備分野

自動車分野は、2 年生を対象に自動車整備士の職業意識および自動車整備士に必要な能力をテーマとして実施した。

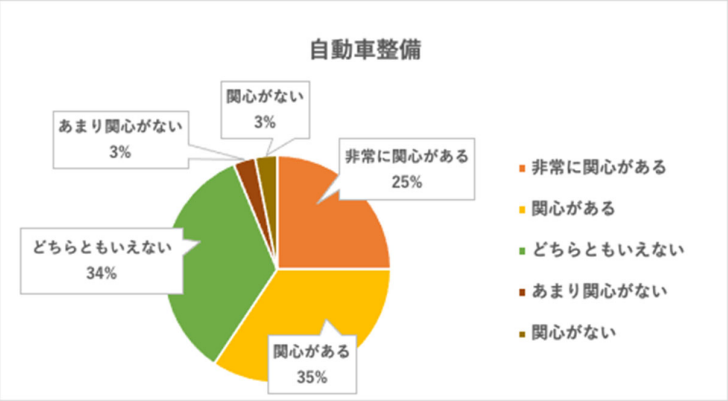
以下は、今年度に実施した項目である。

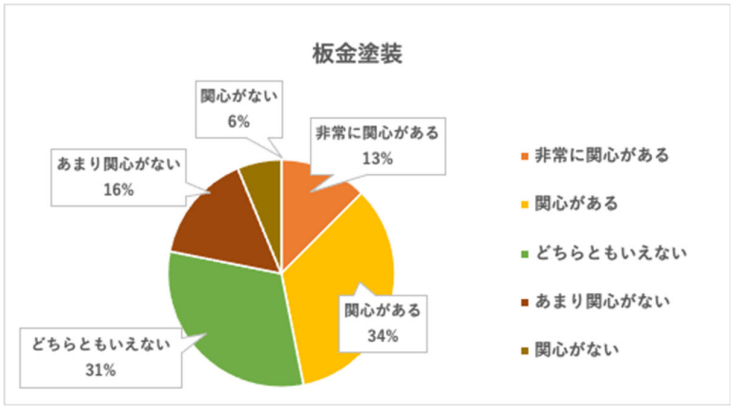
【「自動車整備分野」における連携授業実施項目】

▸2 年生（約 40 名）:「自動車工学」（座学）

	テーマ	内容	コマ
①	自動車整備士の職業意識	【社会的責任を担う自動車整備士】	1
②	自動車整備士に必要な能力	【専門職としての自動車整備士】 【自動車整備士の視点】	2
		総コマ数	3

【2 年生終了時アンケート結果】





授業全体を通して、質問や感想など（一部抜粋）

- やりたいことを探ることの重要性を理解したこと
- 車が好きだからなりたい
- 車が好きだから
- 二輪の整備について興味がある
- 工場を開きたかったから
- 生活インフラと同じくらい大切な車を整備出来るとたくさん助けになれるから
- 自動車科に入って車の仕組みを学んでから、仕事にしたいと思ったから
- 沖縄は車必須だからそれを直せる人になりたい
- 3 級整備士の資格を取ろうとしているのでなろうとおもった

自動車整備分野は、2 年生を対象に自動車整備士の職業意識および自動車整備士に必要な能力をテーマとして実施した。アンケート結果では、60%が自動車整備士となることに関心を持っていると回答した。加えて、1 年次および 2 年次に連携講座を受講した 3 年生に追加アンケートを実施したところ、75%が連携講座は役に立ったと回答し、また自身の興味・関心・将来の夢に基づいて進路選択をしたと回答した生徒が多数を占めた。

第 4 節　グローバル分野

「グローバル分野」では、県立石川高等学校の 1 年生～3 年生を対象として、「情報Ⅰ」及び「総合的な探究の時間」の科目内で連携授業を行った。

連携した専門学校は、専門学校日経ビジネス、琉美インターナショナルビューティカレッジ、専門学校 IT カレッジ沖縄、琉球調理製菓専門学校である。

また、事業参画校ではないが、2年生での企業訪問や3年生対象の専門学校生講話などにおいて琉球リハビリテーション学院も参加した。

グローバル分野における高校 3 年生の取り組みは、進路選択をテーマとして、専門学校生の講話や進路選択に関するプレゼンテーションの実施などを行った。

以下は、今年度実施した項目である。

【「グローバル分野」における連携授業実施項目】

▸1 年生（4 クラス　約 110 名）:「情報Ⅰ」「総合的な探究の時間」

	テーマ	内容	コマ
①	キャリア基礎	オリエンテーション／コミュニケーション／マナー／表現方法	12
②	職業人講話	職業人講話（沖縄 UDS 株式会社）	4
③	映像制作	コンセプト決め／撮影・素材収集／映像編集／発表会（SKYKIN 株式会社）	40
④	企業訪問事前学習	2年生の企業訪問発表会に参加	2
		総コマ数	58

▸2 年生（約 120 名）:「総合的な探究の時間」

	テーマ	内容	コマ
①	チーム＆テーマ決め	・チームで企業訪問を通したテーマを決定	1
②	マナー教育	・企業訪問に関するマナー	1
③	事前調べ学習	・訪問先に関する事前調べ学習	1
④	企業訪問	・関心分野の企業に訪問	5
⑤	振り返り	・企業訪問振り返り、まとめシート作成	2

⑥	発表会	・企業訪問を通じて学習した内容を発表	2
		総コマ数	12

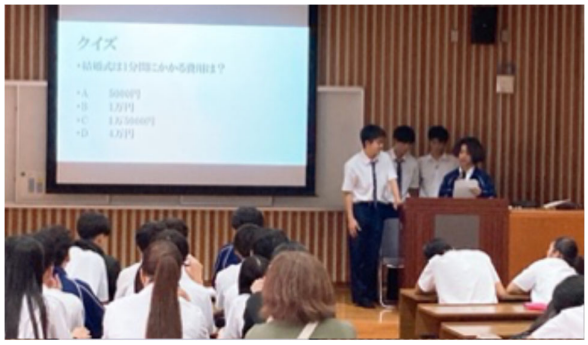
▸3 年生（約 120 名）:「総合的な探究の時間」

	テーマ	内容	コマ
①	専門学校生講話	専門学校生による進路選択に関する講話	2
②	マナー講座	面接用のマナー講座	1
③	発表資料作成	PowerPoint 形式で発表資料の作成	3
④	発表	作成したプレゼンテーション資料を投影し、発表	3
		総コマ数	9

【連携授業の様子　上：1年生　左下：2年生　右下：3 年生】

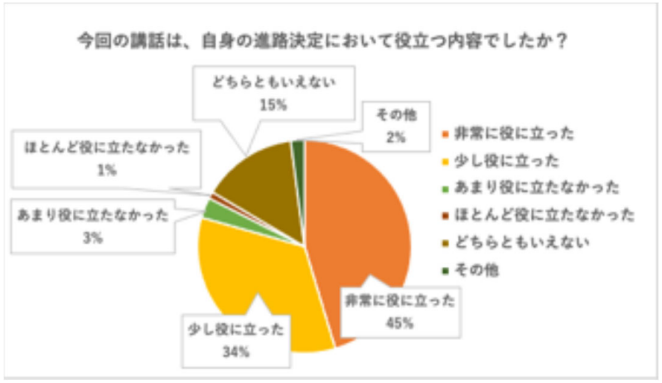


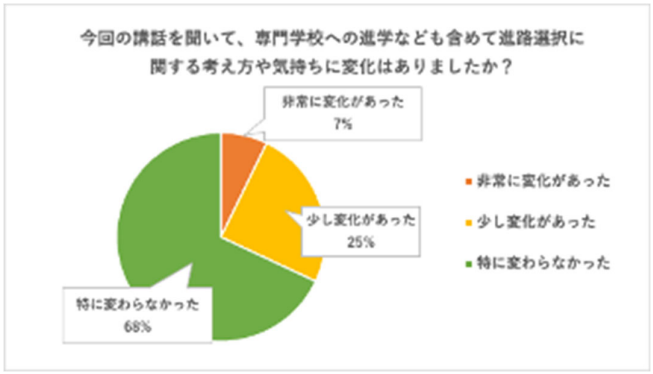


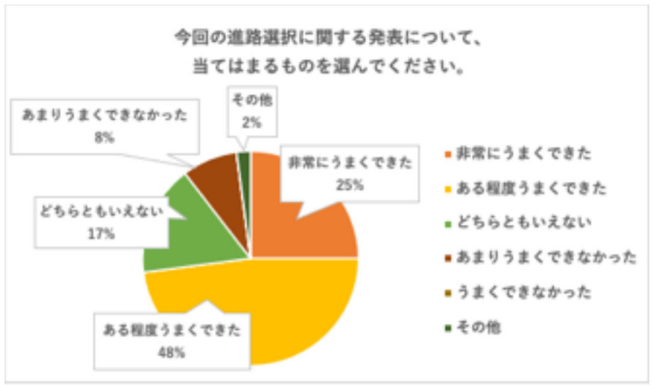


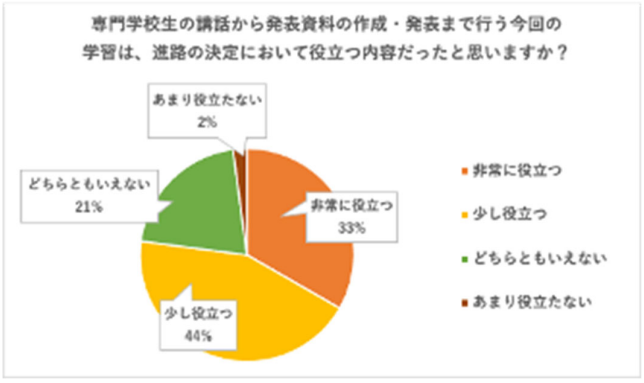


【3 年生：専門学校生講話後および学習全体に対する授業後アンケート結果】









授業全体を通して、質問や感想など（一部抜粋）

- やりたいことを探ることの重要性を理解したこと
- 今まだ決まっていない状態だから、決める上でなんとなくではなく自分がどこで何を学びたいのかを考えて後悔しないようにしたいと思った。
- 今までは、医療系一択だったけど他の分野もとても楽しそうで、視野を広げて自分に合った進路を見つけようと思った
- 進路選択方法を様々な視点からの考え方を知る事ができました
- 大学しか考えていなかったけど専門もいいなと思った
- 進路活動に役立てることができた
- 自分の進路先をしっかりと考える時間になった
- 今まで以上に進路活動に、主体的に行動できるようになったし、選択肢はたくさんあり、可能性はひとつだけじゃないことを再認識できました。
- 自分の行きたい大学や専門学校の事を調べてもっと詳しくなってさらに興味が出てきたので作成して良かったなと思いました。
- 進路選択方法を様々な視点からの考え方を知る事があまり良くできなかったのでもっと発表や作成をうまくできるようにしたいと思った
- 自分の進路を明確化できた

専門学校生講話については、約 8 割の生徒が役に立ったという結果であった。また、学習自体が進路選択に役立つかどうかについても、4分の3以上が役立つという回答結果であり、多くの生徒にとって効果的であったことがうかがえる結果となった。

第 5 節　情報技術分野

「情報技術分野」では、中部商業高校の１～3 年生を対象として、「ビジネス・コミュニケーション」「総合実践」「課題研究」のなかで連携授業を実施した。連携した専門学校は、専門学校 IT カレッジ沖縄、沖縄ビジネス外語学院、専門学校日経ビジネスである。基本的な授業の進行は、高校の教員が行い、専門学校の教員が技術面や専門分野について学習の支援などを行った。

以下は、今年度実施した項目である。

【「情報技術分野」における連携授業実施項目】

▸1 年生（4 クラス　約 120 名）:「ビジネス・コミュニケーション」

	テーマ	内容	コマ
①	ビジネスマナー	1コマ目　場面に応じた挨拶、お辞儀、身だしなみ 2コマ目　歩き方、座り方、言葉遣い、名刺交換	8
		総コマ数	8

▸情報ビジネス科 2 年生（約 45 名）:「課題研究」

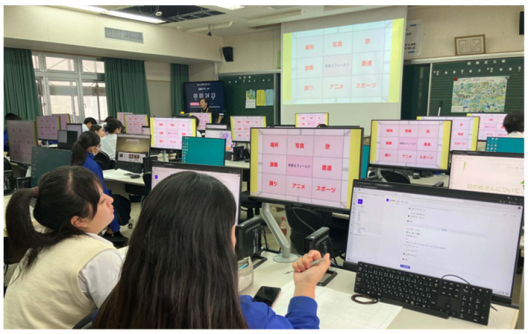
	テーマ	内容	コマ
①	映像制作	映像制作における基本的な考え方や活用ソフトの実践 【映像テーマ】学校の魅力	4

▸国際ビジネス科 2 年生、3 年生合同（約 40 名）:「総合実践」

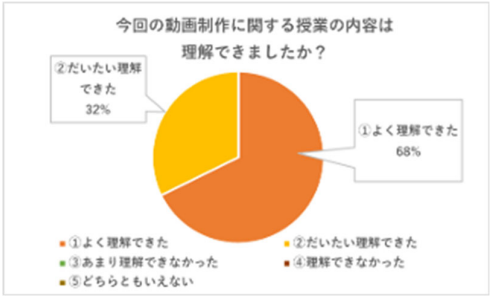
	テーマ	内容	コマ
①	映像制作	映像制作における基本的な考え方や活用ソフトの実践。 【映像テーマ（2 年生）】学校の魅力 【映像テーマ（3 年生）】修学旅行の思い出	2

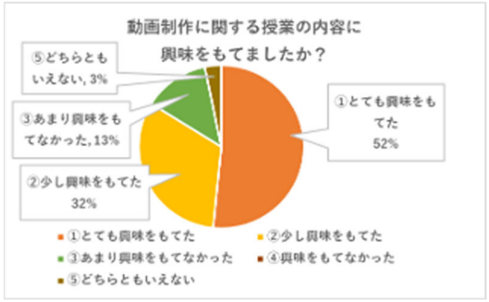
【連携授業の様子　上：1年生　下：2・3 年生】

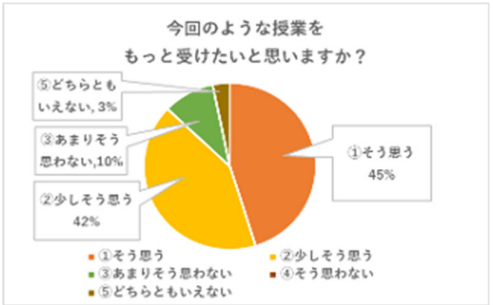


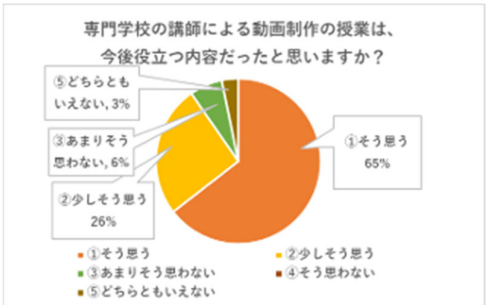



【3年生：授業後アンケート結果】









授業全体を通して、質問や感想など（一部抜粋）

- 今まで行ってきた発表で説明していた日本語で抽象的に伝えてしまっていたことを知り、結果や目標に対して詳細を具体的に分かりやすく説明することを前提に、聞き手に目を配りながら自然とスライドを操作するという基本な動きができていない人が多すぎることにも驚きがありました。普段から力を入れている発表がこれだけ不足しているところが多いことに気づけた良い機会になりました。
- 今現在取り組んでいる、提案書作成やホームページの現状と課題を解決する作業で、その取り組みに役立つような情報がたくさんあったので、今後の活動に役立てていきたいと思いました。
- 今までの現状分析や要求分析などの報告会をした時の発表の仕方で、誰に向けて発表しているのか、発表するまでに内容を具体的にまとめることができているのかという点がすごく大事で、簡潔すぎるとイメージがつかなかったり、人それぞれの解釈で捉えてしまうため別のものができてしまうため、具体性が必要というのが一番納得出来るところでした。次の報告会では、この 2 点をこなして発表するようにしたいと思います。
- 講師の方が話してた内容もとても参考になるものですが、実際に講師の方が話している時の動作や目線、話す速度などが聞いていてとても参考になりました。

2 年生、3 年生対象の講座は、9 割以上が今後役立つという回答であった。また、連携講座を通じて制作した作品 2 点が、「沖縄デジタル映像祭 2025」にノミネートされ、その内1作品が特別賞を受賞するとの大きな成果を上げた。基礎技術と映像表現の考え方、特にターゲット設定やコンセプトの重要性に関する指導が、作品の完成度を大きく高める要因になった。

第 6 節　実証講座のまとめ

本年度は、「ビジネス（IT）分野」「グローバル分野」「自動車整備分野」「情報技術分野」の 4 分野にて高校 1～3 年生を対象とし、実証講座を実施した。総コマ数は 144 コマで、約 640 名の高校生が参加した。

ビジネス（IT）分野では、県立八重山商工高等学校の 1～3 年生を対象に、1 年生は「ビジネス基礎」、2 年生は「ソフトウェア活用」、3 年生は「総合実践」の授業内で連携授業を実施した。専門学校 IT カレッジ沖縄、さらに地元企業等の協力を得て、講話や演習など実施した。3 年生対象の講座は、地元の石垣島 PR 動画作成がテーマであった。アンケート結果から、授業自体について約 8 割が今後役立つという回答であった。

自動車整備分野では、「自動車整備分野」では、県立美来工科高等学校の 2 年生を対象として、「自動車工学」の科目において実施した。「自動車工学」では高校教員が開発教材を活用して講義を行った。アンケート結果では、60%が自動整備士になることに関心があると回答した。加えて、1 年次および 2 年次に連携講座を受講した 3 年生に追加アンケートを実施したところ、75%が連携講座は役に立ったと回答し、また自身の興味・関心・将来の夢に基づいて進路選択をしたと回答した生徒が多数を占め、職業理解や進路選択の一助となったことが分かる。

グローバル分野では、県立石川高等学校の 1～3 年生を対象に実施した。

専門学校日経ビジネス、琉美インターナショナルビューティカレッジ、専門学校 IT カレッジ沖縄、琉球調理製菓専門学校などが講師や訪問先として協力し、企業訪問や専門学校生の講話などを実施した。3 年生では「進路選択」をテーマに、専門学校生のリアルな体験を共有する場を設け、生徒の約 8 割が役に立ったや進路選択に役立つと回答しており、キャリア学習として大きな効果が得られた。

情報技術分野では、県立中部商業高校の1～3 年生を対象に、「ビジネス・コミュニケーション」、「課題研究」、「総合実践」のなかで連携授業を実施した。連携した専門学校 IT カレッジ沖縄、沖縄ビジネス外語学院、日経ビジネスが支援を行い、アンケートでは 9 割以上が今後役立つといった高評価を示した。加えて、連携講座を通じて制

作した作品 2 点が、「沖縄デジタル映像祭 2025」にノミネートされ、その内1作品が特別賞を受賞するとの大きな成果を上げた。

以上のように実証講座を行った 4 分野において、多様な連携が生徒の学習成果や進路選択への有益な支援につながったことが確認された。

特に、実践的な体験を重視した連携授業においては、実際の体験を通じて生徒の興味・関心を効果的に喚起するとともに、職業に対する理解を一層深めることができた点が大きな成果として挙げられる。

また、本実証講座全体を通して、生徒の学習意欲の向上が図られ、将来の進路選択や社会参画に資する知識および技能を提供することができたと評価できる。

第 5 章　教員研修

第 1 節　教員研修の実施及び教材の追加

昨年度開発した教員研修用教材などを活用しての教員研修の実施である。具体的には、連携授業実施前後の分科会や個別的な協議において、教材を活用して高校および専門学校の担当者が参加し、実施した。

教員研修の実施形式については、対面形式で高校教員と専門学校教員、企業の担当者が協議することなどを想定し、オンライン形式など臨機応変に対応可能な状態で実施した。分野によっては、教員研修後に教員などからのフィードバックを踏まえたうえで、教材の追加開発をした。

今年度実施した教員研修は、グローバル分野にて1回である。グローバル分野については、1 年生の実証講座実施に関して、これまで専門学校日経ビジネスが担当していた授業の半分程度を高校の教員が担当する形式で昨年度から実施している。

そのため、高校の教員と専門学校日経ビジネスの教員が参加し、昨年度開発したモデル教材の内容や実施状況などを確認しながら、授業の実施前に行った。

教員研修の数自体は、1回ではあるものの、分科会にて実施内容の確認など教員研修に近い打ち合わせを行っている場合もある。

教員研修教材の開発においては、2 パターンで開発を行っている。

1 つ目は、PowerPoint のモデル教材のノート部分に、説明内容と参考文献、生徒への問いかけ例を表記している。

2 つ目は、指導用ガイドとして講座で活用する PowerPoint スライドとは別の教材を作成しているパターンである。

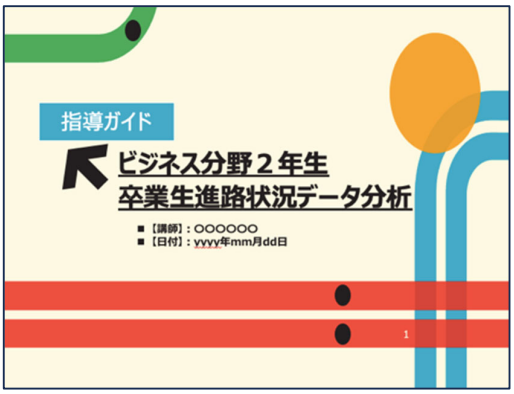
開発した教材は、ビジネス（IT）分野が2年生用55ページと3年生用33ページである。自動車整備分野は3年生2教材合計55ページ、グローバル分野は3年生用4教材で合計72ページである。情報技術分野は、2年生80ページ、3年生用34ページである。総計4分野で329ページの開発を行った。

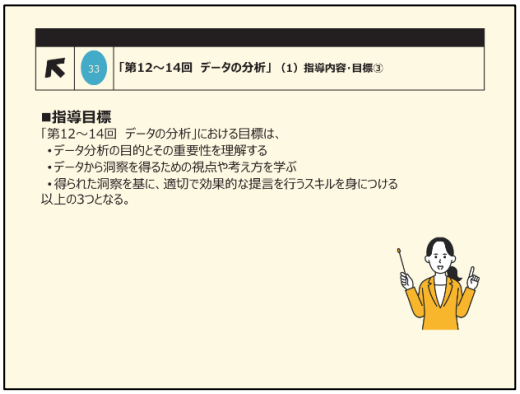
次年度以降において、高校や専門学校の教員などから活用における利便性などに関して意見を求め、より実用的な体裁に整え最終版を開発する予定である。

次項に、教員研修で確認した教材を提示する。

【追加開発した 2 年生教員研修教材の事例】

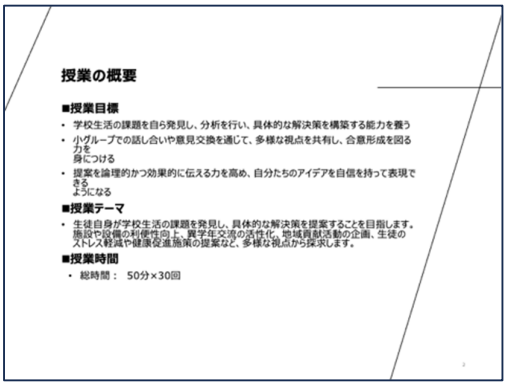
ビジネス(IT)分野





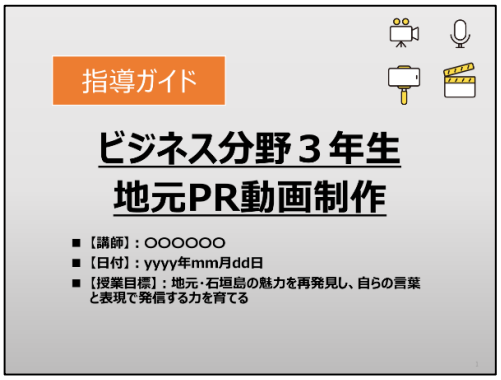
情報技術分野

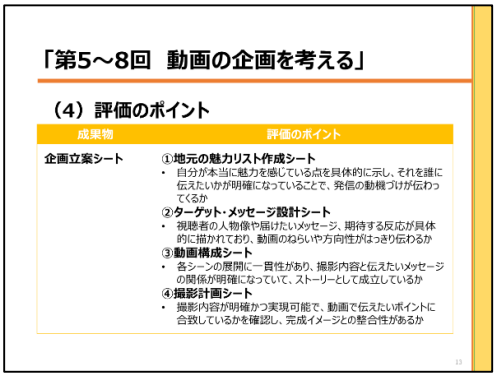




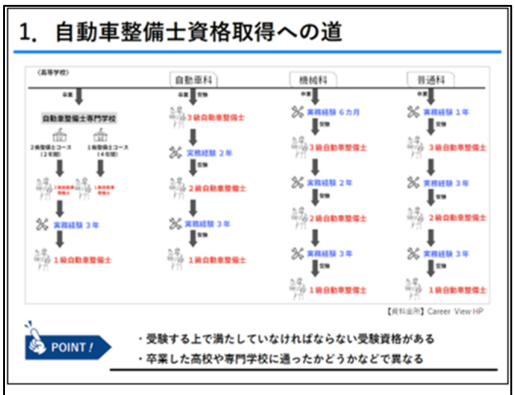
【新規開発した 3 年生教員研修教材の事例】

ビジネス（IT）分野





自動車整備分野



まず初めに、自動車整備士資格取得への道を確認しましょう。

自動車整備士の資格を受けるには、あらかじめ満たしていなければならない条件（受験資格）があります。この条件は、卒業した学校の種類（高校・専門学校など）や、実際に働いた経験（実務経験）の有無によって異なります。

ほとんどすべての自動車整備士資格では、実務経験を積んでいることが受験資格に含まれています。実務経験とは、ディーラー、民間の整備工場、ガソリンスタンドなどで、実際に車の整備や点検の仕事をすることを指します。

もし専門学校などに通わずに資格取得を目指す場合は、最初は資格がなくても働かせてくれる職場（ディーラー、整備工場など）を探して、働きながら実務経験を積む必要があります。①資格なしでも雇ってもらえる場所を見つける、②働きながら受験資格を得るという流れになります。

●参考文献
・「自動車整備士として働くには資格が必要？自動車整備士の資格一覧｜取り方・種類・難易度を解説」Career View HP
参考URL： https://career-view.jp/mechanic/all-qualification/

○生徒への問いかけ例
・自動車整備士の資格を受験するためには、何が必要ですか？
・「実務経験」とは、具体的にどんな場所で働くことを指していましたか？
・あなたが目指す道では、どのタイミングで「資格取得」を考え始めるのがよいと思いますか？



会社では、成果を残したり成長したりすると「上の立場」に上がることがあります。このとき使われる言葉が「昇進」と「昇格」です。よく似ていますが、それぞれ意味が異なります。

昇進ー役職が上がること
「昇進」とは、会社の中での立場（肩書）が上がることです。例えば、「係長」から「課長」、「課長」から「部長」のように肩書が上がります。会議をまとめたり、人を指導したりする役割が大きくなります。

昇格ー等級が上がること
「昇格」とは、その人の「格（等級）」が上がることを意味します。等級は、その人の能力・責任の大きさに応じて決められる社内ランクで、「1級 ー 2級」「4段 ー 5段」などと数字で表されることが多く、給料や任される仕事のレベルに関係します。

●参考文献
・「昇進・昇格」日本の人事部HP
参考URL：https://jinjibu.jp/keyword/detl/1574/

○生徒への問いかけ例
・「昇進」とは何が変わることでしたか？具体的な例も答えてみましょう。
・「昇格」は何が上がることを意味していましたか？

グローバル分野

7．専門学校生のリアルな経験から学ぼう

今、あなたはどんな未来を想像していますか？



「将来の夢は？」と問われたとき、多くは「なんとなくの理想」や「ぼんやりとしたイメージ」を描いていることが少なくありません。

そのため、進路指導では単に職業名を挙げさせるのではなく、「どのような人生を送りたいのか」「どのように生きたいのか」といった自分の生き方そのものを主体的に構想する力を育てることが重要です。

将来に向けたビジョンを描く際には、自分が何に価値を感じ、どんなことを成し遂げたいのか、何を大切にして生きていきたいのかを意識的に考える必要があります。

●参考文献
・「高校生のライフプランニング」文部科学省
参考URL
【 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/11/21/1411248_0_0.pdf】

〇学生への問いかけ例
・どんな人生を送ってみたいと思っていますか？
・今までの経験の中で「これが自分らしいな」と感じたことは何ですか？
・自分が「大切にしたい」と思っていることは何ですか？

9．専門学校生講話で注目してほしいこと



■ 話を聞くときのポイント
・進路をどうやって決めたか　・どんな学びがあって、どんな苦労があるのか
・高校時代に何を考えていたか　・自分に置きかえると、どこが参考になるか

■ 5W 1H
・いつ（when）、どこで（where）、誰が（who）、何を（what）、なぜ（why）、どのように（how）を意識しながら、キーワードや心に響いた言葉を書き取ろう。

専門学校生講話をただ聞くだけで終わらせず、進路選択のヒントがたくさん得られるよう、以下の4つの視点を意識して聞くよう生徒に促しましょう。
①進路をどうやって決めたか
「どうしてその進路に決めたのか？」は、進路選択の本質に迫る重要なポイントです。
②どんな学びがあって、どんな苦労があるのか
専門学校での学びは、実習や資格取得など「リアルな現場に近い学び」が多いのが特徴です。
③高校時代に何を考えていたか
講話者も、ほんの数年前までは高校生でした。高校時代にどんな不安や悩みを抱え、何を大切にして進路を考えたのかを聞くことで、自分との共通点が見つかるかもしれません。
④自分に置きかえると、どこが参考になるか
ただ話を聞くだけではなく、「自分だったらどう感じるか」「どこが今の自分のヒントになるか」と自分事として受け止めることが大切です。
また、5W 1H（いつ（when）、どこで（where）、誰が（who）、何を（what）、なぜ（why）、どのように（how））を意識しながら、キーワードや心に響いた言葉を書き取るよう促しましょう。

●参考文献
・「高校生のライフプランニング」文部科学省
参考URL
【 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/11/21/1411248_0_0.pdf】

情報技術分野





第 2 節　教員用ガイドの追加開発

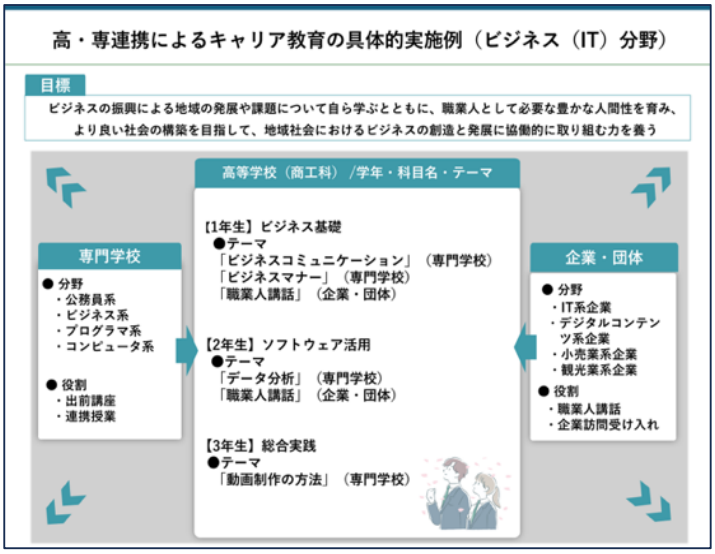
教員用ガイドは、事業終了後にも、高等学校が継続的に専門学校や企業、団体とより有意義な連携体制を構築し、効果的なキャリア教育を実施していくために必要となる情報やノウハウなどをまとめた資料である。

今年度は、昨年度までに開発したガイドをベースに、授業前後での教員研修での活用や、担当を引き継ぐ際の負担軽減を目的に、分野別の具合的実施例を参考に、協力体制を模式化したスライドを作成した。

また、各分野で開発した教材の項目一覧と URL または QR コードを通して閲覧が可能な資料の追加も行った。これは、高校教員からの要望を受けての開発である。

以下に、今年度追加開発したガイドのイメージを提示する。

【教員用ガイドの追加開発の一部】





1．ビジネス（IT）分野　開発教材一覧

分野	学年	対象科目	テーマ	教材名	閲覧用	授業用
ビジネス（IT）	1年生	ビジネス基礎	コミュニケーション マナー	ビジネスとコミュニケーション		
				ビジネスマナー		
				マーケティング		
				さまざまなビジネス		
	2年生	ソフトウェア活用	卒業生進路状況データ分析	卒業生進路状況データ分析（10H）		
				卒業生進路状況データ分析（拡張版 20H）		
	3年生	総合実践	地元PR動画制作	地元PR動画制作（30H）		
				地元PR動画制作（短縮版、15H）		

第 6 章　今年度における活動項目のまとめ

実施委員会は、予定通り 3 回開催した。分科会は、分野ごとに回数は異なるものの、専門学校や高等学校の教員を中心に、今年度の連携授業内容や来年度の授業計画などに焦点を当てて協議を行ってきた。分科会に加えて、専門学校や高等学校、企業・団体との個別協議も必要に応じて多数開催した。

また、これまでと同様に、高校教員の異動決定が2月であり、3月以降に科目担当者が確定する背景から、次年度の連携授業の内容やスケジュールの確認などを議題として、事業期間終了外とはなるが令和 8 年 3 月以降も継続して分科会などを開催することで調整している。

一貫型職業教育プログラムの開発においては、各分野・各学年のカリキュラムの設計とそこで使用される教材の開発、プラットフォームの整備に注力した。

カリキュラム設計においては、これまでの連携授業における実績などをもとに高校 1 年生～3 年生までの対象分野応じた改訂や新たな設計を行った。専門学校段階については、次年度での実施に向け構成を整えた。

教材開発としては、まず高校1～2年生用のモデル教材追加開発および高校3年生向けのモデル教材新規開発である。昨年度までに開発した1～2 年生用の教材の一部については、今年度の連携授業においても実際に活用し、専門学校教員、高校教員、生徒からのフィードバックに基づいて必要な追加開発を行った。高校 3 年生用については、昨年度および今年度の実績をもとに新しく開発した。

併せて、e ラーニング教材の追加開発も行った。昨年度までに作成した自由記述式の問題を e ラーニング上で活用可能とするため、PowerPoint 形式にてスライドを作成し、動画化を行った。

一貫型職業教育プログラムプラットフォームについては、事業期間終了後での活用を想定し、高校や専門学校の教員による連携機会の創出などを目的としたマッチングシステムを整備した。次年度以降において、試験的に実施し、改善を図っていく予定である。

実証講座は、昨年度までと同様にビジネス(IT)、自動車整備、グローバル、情報技術の4分野にて実施した。連携授業の総コマ数は１４４コマで、参加生徒も合計約６４０人であった。

授業の実施体制についても、これまでの実績や高校側との役割分担もあり、総コマ数はそこまで変えずに、効率的な運用も着々と進められている。

講座においては、授業後などに生徒へのアンケートや教員・講師などへのヒアリングを通じて検証を行いながら実施している。アンケート結果からも高い評価が確認で

きる。加えて、分科会や個別協議においては、高校教員からも事業自体の継続を要望する声もある。

以上も踏まえ、事業自体としては 5 年目である今年度においても順調に事業を進めることができたといえる。

次年度以降の具体的な取り組みについても、これまで培ってきた実績やノウハウをベースに、専門学校や高校、企業、団体などと継続的に協議を継続するとともに、事業期間終了後の展開についても準備を進めていく。